

第3回福井城山里口御門復元考証専門委員会 議事要旨

日 時 平成26年2月14日（金）14：00～16：00

場 所 福井県庁6階 大会議室

①基本設計（復元案）について

- ・櫓門上階、両妻の破風板の部分は石垣との隙間が狭く施工方法を考える必要がある。
- ・土塀の軒下に櫓門の屋根が入ると、後から作る土塀は塗籠めできなくなる。出来ない所を放ってあるというのもおかしいので、何か考える必要がある。
- ・屋根と石垣に隙間がないよう石垣に密着させた方が雨水の始末が良いのではないか。
⇒石垣間の幅が西側から東側に行くにつれて狭くなる。石垣の南東隅に痕跡が一ヶ所だけ存在しているため、痕跡部分が屋根の最大幅であると考えている。
- ・櫓門と石垣の間が両側空いているが、目隠しなどしてもよいかもしれない。
- ・櫓門と石垣との間が狭く、特に側面の壁の下部分の塗り方が難しい。石垣との間が空いていると、吹き込んでくる雨の雨仕舞も難しい。類例もないため、実際には施工の段階で考えるしかない。
- ・基本的には発掘した平面遺構と立面に残っている痕跡を参考にして案ができています。同時期の遺構を明確にして、忠実に活かしてやっており良いと思う。
- ・絵図にある棟門の屋根の色が、三枚とも石の色ではないが、本当に石瓦か。
⇒明らかに石瓦の痕跡が出てきているため、痕跡を重視している。

②石垣修復について

- ・N値が2程度でも石垣が十分据わっている所がある。
- ・従来工法で修復した方が長く持つのではないか。
- ・施工範囲について、門の両側の石垣は、痕跡がずれており、痕跡を元の位置に戻して復元するためには、修復する必要がある。
- ・大きく孕んでいる部分については、数年間変位量を測定したが動いておらず安定しているため、無理に範囲を広げて解体する必要は無い。笏谷石の確保の問題もある。
- ・石垣上の木は切る必要がある。北側石垣の隅の大きなエノキは、根が石垣の一番下の根石の部分にまで出ており、根まで取り出すと、全部解体することになり大変である。切ってみて枯れた時に石垣がどう動くか、十数年間様子を見た方がいい。
- ・石垣上の土塀の長さや位置も、石垣の修復に合わせて考えていくということか。
⇒土塀の復元の範囲についても、石垣修復の範囲と合わせて決めたい。
- ・今後の分析の結果によって、どこまで石垣を修復するかというのは、ある程度まとめないといけない。
- ・埋蔵文化財の包蔵地であり、杭を打つかどうかは慎重に検討すべき。しかし史跡で

はないため建築基準法の特例も認められない。

- ・上部での構造補強は可能だと思うがどうか。
⇒上部の構造補強も必要かもしれない。ただ、最終的に地耐力の検討が必要である。

③石瓦について

- ・石瓦は、いらぬ筈石を砕いて、擬石を作る実験をしてみてもどうか。
- ・筈石と言っているのに他所の石を使ってもしょうがないのではないか。
- ・本物の石を使うと重量的な問題も出てくる。材料そのものもなかなか入手しづらい。
- ・土塀の腰板は筈石で出来ていて、これは福井城の一つの大きな特徴となっており、筈石をうまく活用しなくてはいけない。しかし本物はなかなか入手できないため、検討の余地が出てくる。
- ・今回少しでも土塀に筈石の腰板を貼ったら、他の復元を続けてやろうとする時に全部やらないといけなくなるのではないか。
- ・石でできるようになったら貼るとして、今は貼らずにおいておくのもありかもしれない。
- ・腰板から屋根まで筈石を使うとなると、相当な量がいることになる。
- ・筈石をある程度細かくして、スプレーで鉄板の上に吹き付けると、石瓦のようにならないか。